

# 本を選ぶ

- 蔵書について考える
- 調布市立図書館を訪ねて
- それはなぜ？ どうしてなの？ 疑問に答えられる図書館を！
- DMかたろぐ

2018年(平成30年)4月20日

●発行/ライブラリー・アド・サービス  
〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726  
<http://www.las2005.com>

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## 蔵書について考える

佐川 祐子

2009年4月から2017年3月まで8年間、杉並区立小・中学校の学校図書館支援担当をしていました。担当となった当時は、学校司書の配置を開始したところで、学校司書の研修や業務に関する相談を受けるほか、学校司書が入る前の学校図書館の整備のお手伝いもしていました。相談を受けた中で多かったのが、蔵書の除籍と購入についてです。

学校司書が入る前、中学校の図書館の蔵書は全体的に出版年の古いものが多く、分類の構成も文学中心でバランスの悪いものでした。文学や物語については読みごたえのある本も多く入っていましたが、調べ学習用の本では、新しいものは修学旅行や職場体験学習に使う本が中心という状態でした。

どの中学校でも、古い百科事典や文学全集がずらりと並び、文学の棚には小学生向けの物語と昭和の純文学が混在していました。知識の本については、内容が陳腐化したものや例えば海外の地理の本で国名が変わっているもの(東西ドイツ、ソヴィエト連邦等)等が依然として残っていました。

そこで、除籍する候補となる本を机に積み上げ、そのまま除籍する本と買い換えて新しい本が来てから抜く本に分けてもらいました。控えめに抜いたつもりでもかなり量が減ってしまいましたが、古い本

を抜くことで、埋もれていた新しい本が目立つようになり、かえて生徒の利用が増えた、本を借りるようになった、という感想もいただきました。

学校司書が中学校全校に配置されてから5年が過ぎ、ようやく蔵書が整ってきました。しかし、文学の棚には一般書の映画やドラマの原作本、エンタテインメント作品が目立つように思います。一方、児童文学の作品は、中学生までに読まないとそのまままになってしまいます。中学を卒業してからも読むことのできる一般書よりも、中学生時代にこそ読んでほしい本を手渡すことが学校司書の仕事です。

したがって、評価の定まった作品や長く読み継がれてきた作品をしっかりと読んでおくことが基本となります。選書の基準を自分の中に作り、質の高い本を揃えること、そしてそれらの本を展示やブックトーク(集団向け、個人向けに)等、様々な工夫をして手にとってもらうことが大切だと思います。

部活や塾などで本を読む時間がない中学生にとって、朝読書は読書のきっかけとなる貴重な時間です。学校図書館にとっても、目立たないけれどもおもしろい本、読んでほしい本が利用される絶好のチャンスです。朝読書の時間にブックトークをしたり、学級貸出をしたりするのはいかがでしょう。

私は今、公共図書館で選書や除籍等、蔵書管理の仕事をしていますが、学校図書館で蔵書づくりのお手伝いをした経験がとても役に立っています。

学校司書の皆さんには、ぜひ学校の近くの公共図書館を使ってほしいと思います。そして、公共図書館から足が遠のいている中学生に利用の橋渡しをお願いしたいと思っています。(さがわ さちこ)

# 調布市立図書館を訪ねて

～中学生の手作り冊子「ぶちねこ便」を見守って34年～

東京都調布市の調布市立図書館では、中学生の記者たちが作る手書きの冊子「ぶちねこ便～中学生へのお届けもの～」を毎月発行されています。昭和59年（1984年）に始まったその活動は、今年34年目を迎え、冊子も396号を数えました。

今年度最後の編集会議にお邪魔し、「ぶちねこ便」がどんな風に作られているかお話をうかがってきました。

## 編集会議は和気あいあいと

3月第2日曜日、中央図書館のある施設の会議室に、市内在住・在学の中学生たちが集まりました。中学生8名、小学生の見学者3名。そこに「ぶちねこ便」担当の職員4名が加わります。

編集長の、ペンネーム・来夢（らいむ）さんが進行役を務め、まずは発行済みの今月号（No. 396）の見直しです。「ぶちねこ便をより多くの人に読んでもらうために反省をする」というもので、誤字脱字、おかしい言葉遣いなどをみんなで細かく指摘し合います。文字の意味や漢字を調べる時は、各自のスマートフォンで確認し合い、常にスマホが手元にあるのがいまどきの中学生らしいと思いました。

記者はそれぞれペンネームで記事を書いているのですが、そのペンネームで互い呼び合い、間違いの指摘も率直に言い合っているのがとても印象的でした。会議の間もイラストを描きながら発言したり聞いたりという子がいれば、小さな声で隣の子とおしゃべりをしつつ時々発言もするという子も。皆、それぞれにリラックスして楽しみながら参加している様子でした。

その間、職員の方が口をはさむことはほとんどありませんでした。「小学校高学年の子たちにも読んでもらえるよう、ルビを振ってくださいね」と発言されたくらいです。中学生記者たちに任せていらっしやると感じました。

ひとしきり気づいたことを確認し合うと、職員からの今月号についての講評です。イラストでキャラ

クターを描く場合は自分のオリジナルを描くよう、アニメなどの既製のイラストは描かないようにとの指摘がありました。著作権法に触れないようにというお話でしたが、冊子を作る上でのルールや心掛けをまず記者たちに伝え、あとは自由に書いてもらっていることが伝わってきました。

そして次の議題は、来月号の担当決めです。特集は何にしましょうか、表紙・裏表紙は誰が描きますか、各ページは？と、司会が聞いていくと次々に手が挙がり、ページの担当が決まっていきます。さすが、書きたい人・描きたい人が集まっていると驚きました。

毎号の紙面構成は大体決まっていて、最近のニュースなどを紹介する「おしえて！ぶちねこ便」、自分の好きな話題で調べたり考えたりして書く「普通原稿」（タイトルは各自でつける）、「ポエム」や「小説」、「ぬりえ」などのページがありますが、ページ数は特に制限がないのだそうです。それぞれ書きたい人がいれば、書きたいだけ書けるとは、何とも自由ですね！

ここで決まった執筆担当の記事は、2週間後の編集作業日までに市内の図書館に提出とのことでした。職員の方々が記事をチェックしたのち印刷、ホチキスで綴じられた「ぶちねこ便」は市内の図書館・小中学校・公民館などに配布されるのです。

## 中学生記者たちの声

記者の皆さんへ質問する時間もいただきました。記者になった経緯を聞いてみると、美術部の友だち同士で誘って入会したという子たちがいれば、小学生の頃から「ぶちねこ便」に憧れていて、中学に入るやすぐに参加したという子も。また、ある子は、「絵を描くのが好きで、描きたくて参加した。文章を書くのは少し苦手だったけれど、ぶちねこで書くようになって、学校で作文とか書くのがラクになってきた。書き方も分ってきたように思う」と話してくれました。

「ぶちねこ便」作りで嬉しいことは、読んでくれた人から感想をもらえたり、よかったよと言ってもらえたりすることだそうです。でも、自分から友人や家族へ「読んで」と手渡す子はいないらしく、恥ずかしがり屋な一面もあるのだなと思いました。

「同じ年頃の子たちに読んでもらえるように作っている。自分も読者だったので、読者の気持ちはわかるつもり」と語る中学生たちの目は輝いていました。

### サポートし見守る中で

職員の方々はどうのようにご覧になっているでしょうか。「ぶちねこ便」を担当されて2年という占部さんにお話をうかがいました。

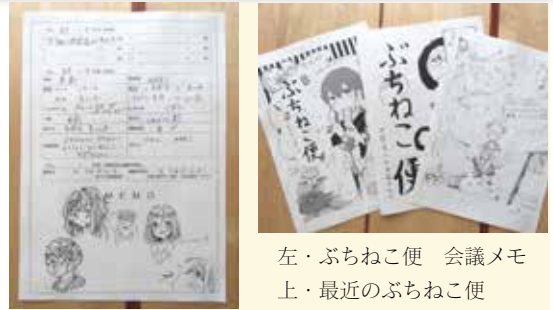
「中学生の視点で物事を観察し「手書きで記事を作る」という理念で活動する「ぶちねこ便」。それをサポートする職員の方々には、記者たちの自主性を尊重することを常に心がけていらっしゃるそうです。図書館の発行物であるので、内容が適切であるか一定の線引きはされているそうですが、冊子作りの大半を中学生に任せ、中学生の等身大の表現の発信を手助けすることは、ひとかどのことと思いました。

中1から中3までの活動なので、記者たちの成長を目の当たりに出来るのがとても嬉しくやりがいがあるそうです。原稿の内容も取り組み方もぐんと進歩するのだとか。また、中学生と実際にコミュニケーションできるのも意義深いとのことでした。子どもたちの読みたい本、読んで面白かった本などを聞いて、選書や棚作りの参考にされているそうです。

新入記者を募るため、この春は市内の中学1年生全員に「新入生歓迎号」を配布するそうです。新しいことに挑戦したいと思っている中学生が、多く入会するとよいですね。学校や学年の違う仲間が出来る、文章の書き方や冊子の作り方が学べる、自分の興味のあることを追求出来る…などと、なかなか得難い経験が待っているはずですよ。

### 参考図書室に揃ったバックナンバー

中央図書館の参考図書室には、「ぶちねこ便」が創刊号から保存され、誰でも閲覧できるようになっ



左・ぶちねこ便 会議メモ  
上・最近のぶちねこ便

ています。創刊0号は、まだ名前も決まっていない「???新聞」。ガリ版摺りのB4版1枚です。当時開催されていた「中学生読書会」の、参加中学生たちが手作りで発行したこの号がきっかけとなり、次の1号で「ぶちねこ便」と名称が決まり、巻頭文には「中学生のための中学生による身近な話題を提供する新聞となりました」とあります。3号は、B5版で左開きの12ページ。判型は小さいですが、内容はほぼ今のスタイルで、本や漫画の紹介、小説・イラスト、自己紹介、自由テーマのコラムなどです。特に初期の頃は、担任の先生の結婚話や面白かったテスト問題の紹介など、学校の話も自由に書いているのが大胆で面白く思いました。

きれいに製本保存されたバックナンバーを、ご覧になる方も時々いらっしゃるそうです。あの記事がよかったと覚えていて、話してくれる方などもいると聞きました。参考図書室の棚に、小学校の開校記念誌、中学校のお便り集などとともに「ぶちねこ便」が並んでいる様子から、子どもたちを地域ぐるみで見守る姿勢が伝わってきます。市内の中学生の生活や息遣いが伝わるような「ぶちねこ便」は、まさに地域の宝物なのでしょう。

先年開催された、「ぶちねこ便」の30周年の同窓会には、関わっていた方々が大勢お祝いに駆けつけ、新旧の交流を深められたそうです。中学生の記者同士のバトンはもちろん、職員の方々が34年もの間バトンをつなぎ、守ってこられた賜物と感じ入りました。

\*

調布市立図書館の職員の方々の皆さん、中学生記者の皆さん、ありがとうございました。これからも楽しみにしています！（LAS探検隊）

# それはなぜ？ どうしてなの？ 疑問に答えられる図書館を！

星野 千鶴子

最近こんなことがありました。

一年生の国語で、「自分の苗字の部首を探す」という課題を出したところ、「才」の字が、漢和辞典によって「一」に入っていたり、「てへん」に入っていたりすることが判り、それはなぜかと問われました。

凡例を比べていくと、部首は「康熙字典」という中国の字典（1716年）の部首の分け方に従っているようですが、私たちが使い易いように編集してあるもの、「康熙字典」に忠実なものがあるようでした。こんな場合は、学校としてどの字典を使うかで決まります。

疑問に答えられる本を選ぶのは、司書の仕事です。

小学生と大人を対象にした本は沢山出版されていますが、「中学生が抱く疑問に答える本なのか」、いつもその観点から本を見えています。

文学作品は、そう苦労をしなくても選べるように思いますが、理数系の本や図鑑は難しいように思います。

理数系の出版物の代表と言えるかもしれない図鑑類は、各社それぞれの視点に立って他社には無い工夫が見られます。でも、予算の関係で1冊しか買えません。そんなとき、私は写真だけでなく、細部まで絵で描かれている図鑑を選ぶようにしています。何故なら、写真では影になって見づらい箇所も絵ならば描き出せるからです。

写真だけでは、綺麗か面白いかに目が行きがちですが、「疑問」に答えるのは、文章と絵ではないでしょうか？ その場合、残念に思うのは絵が黒1色で描かれている場合です。色とりどりにしなくても2種の色でも理解する楽しみは、ぐうんと大きくなります。それに文章も、裏表でひとつのことを説明するより見開きで1項目というような配慮がほしいなと思うことが多いです。

最近インターネットで解決することも多くなったようですが、不思議とか何故？の答に導くとい

うより、「こんなになるんだ」「こんな面白いことにもなるんだよ」で終わる例が多く、それは中学生にとっては、残念だと思うことも多いです。

例えば、科学クラブの生徒が、ビスマス元素を買ってきて、温めると溶けて、冷やすとまた固まり、その形がギザギザの面白い形だったよと教えてくれたことがありました。ユーチューブにあった実験だそうですが、物は温めると溶ける、冷やすと固まることを楽しんだだけで、物が溶けるといっは、水溶なのか、その物自体が溶けるのかなどについては素通りで、面白いで終わってしまいます。

司書としては、とても残念です。

今話題にすると失笑されるかもしれませんが、岩波書店の『算数と理科の本1～30』は、中学生も基本を理解するのによく工夫されたシリーズでした。このシリーズを引き継いで現代の中学生向きの科学の本があればなあと思います。

『これならわかる！科学の基礎のキソ（ジュニアサイエンス）』（丸善）では8冊目が出ています。この先良いシリーズになるように期待しています。

司書として中学生が読んで疑問に答えられる本としてよく利用しているのは、大人のための『ニュートン』（ニュートンプレス）と、子ども対象の『たくさんのふしぎ』（福音館書店）です。

学校の図書館では、「図書館資料購入基準」があり、過激な暴力や性の表現、生物の生死を軽んじる表現、自殺・殺人の方法などを詳細に記した図書、自傷行為を肯定するような図書などは選ばないなど表現については、配慮されていますが、「疑問」を解決する本のある図書館というテーマは忘れられがちのように思えますが、その方向でも頑張りたいと奮闘中です。

（ほしの ちずこ：中学校司書）